

弱音など吐いてはくれませんが、「大場さんのレンコンは、やっぱり違うね」なんて言われると、本当にうれしくなります。それと、農業で食べていけるようにしたいのです。後継者にはしっかりと農業の基盤を作ってから経営を渡したいのです。栗原市は高齢化率が宮城県で一番高く、この地区でも農業を継ぐ若い後継者が少ないです。だから、レンコンで農業の柱をしっかり立て、レンコン産地として、地域に後継者が残るようにしたいです。だから頑張ります。

また、ここが産地として残るためには、大切なことがあ

ると思っています。それは、自然との共生です。以前、農薬を使わず、たい肥などをメインにした有機農法で米作り

に挑戦したとき、田んぼには、ドジョウやトンボなどたくさん

の生き物が復活し、自然が持つ力を実感しました。その経験から、伊豆沼レンコンの生産でも、できるだけ農薬を使わず、有機肥料を多く使いつながり生産するようにしています。



優しい気持ち が甘味の秘密

稲刈り後の田んぼには、落穂をついばむマガンの群れ。その上空では、マガンがV字に並び、仲間を鼓舞するように鳴きながら飛んでいる。秋から冬にかけて伊豆沼周辺でよく見る光景だ。

その光景のすぐ脇の田んぼで黙々とレンコンを収穫する人たちがいた。レンコンの生産者で作る伊豆沼レンコン育成協議会の会員たちだ。この会では、共同で管理する田んぼと会員それぞれの田んぼで年間約50トンのレンコンを生産している。

収穫時期を迎えたレンコン。その収穫作業は、手作業になり

る。足元を取られそうになりながら泥の中を中腰で進み、指先の感覚を頼りにレンコンを探していく。見つけると高圧ホースで水を吹き付け、泥の中からレンコンを引き上げる。持つ場所や力加減が悪いと、せつかく見つけたレンコンが折れてしまう。意外と難しく、重労働な作業だ。そのため、栗原では主に男性が収穫作業を担っている。また、掘り出したレンコンを洗った

- 1 伊豆沼レンコン育成協議会の会員たちが共同で収穫作業を黙々とこなす。
- 2 一つ一つ手洗いされる伊豆沼レンコン。長時間の水仕事は過酷な作業になる。
- 3 収穫されたばかりの伊豆沼レンコン。土壌に鉄分が多いため、表面が初めから黒い特徴を持つ。
- 4 手探りでレンコンを収穫する大場一夫さん。
- 5 ひげそりと言われるレンコンの根を一つ一つ丁寧に取る地道な作業。

り、ひげそりと言われる節の間にある根を取り除く作業など、出荷作業は主に女性が担っている。

だが、大昔からこの辺りに住む人は、この沼と共生してきました。だから、私も、できるだけ自然と共生した農業をしていきたいと思っています。

岐路に立つ 伊豆沼レンコン

高齢化が進む栗原市。伊豆沼レンコンの産地も同様に高齢化が進む。それに加え、収穫作業の厳しさから生産者の

人数は伸び悩んでいる。しかし、暗い話ばかりではない。伊豆沼周辺にある小さな田んぼを大区画化する話し合いが

進む。この計画に

極寒に耐え産地をつなぐ

真冬の収穫作業は、一体どのようなものなのか。伊豆沼レンコン育成協議会の生産者の一人、大場一夫さんに話を伺った。

伊豆沼レンコン育成協議会の会員に勧められ、レンコンの生産を始めて7年。毎年、厳しい寒さとの戦いです。真冬にもなるとレンコンの田んぼに厚い氷が張ります。大きなハンマーでその凍った水面を割り、胸の高さまで水に浸りながら、進んでいきます。まさに極寒の作業。もちろん防水の胴長や手袋を着込んで作業をしますが、冷気はいくら着込んでも伝わってきます。また、ふとした拍子に脇の下から水が入り込んでくること